

## 第8回 ジャーナル・クラブ今昔物語



学部の6年生の時に、有志でやっていた謎解き輪読会が、私のジャーナル・クラブの最初でしょうか。

週刊誌のNew England Journal of Medicineの中にある”Case records”を取り上げて、診断名を謎に仕立てて輪読しました。この抄読会には指導者がいませんでした。その代わり、サポートをしてくれそうな先生を見つけては教えを乞いました。

私が当番だった時、症例報告を読んで、日本語の教科書を参考にしてもさっぱり分からないことがありました。そこで、当たりをつけた医局に飛び込んで、英語の教科書をいろいろ借りて読み漁り、何とか「犯人（診断名）」を探し出そうとしました。

探し出したのが「ホシ」かどうか判断するのは、臨床経験がない学生には無理でした。そんな時は、医局に戻って、知っていそうな先生を捕まえては、自分の推理が間違っていないかを確認するのがでした。

中には、面白がって原文と一緒に読んでくれる先生もいました。勿論、「ホシ」を教えてくれとは口が裂けても言いませんでした。学生の矜持です（！？）。



\*\*\*\*\*

本格的なジャーナル・クラブを経験したのは大学院生になってからです。ジャーナル・クラブは毎週開催され、教員と大学院生全員が参加しました。当番になると、自分の研究に関連する最新の英語論文を紹介しました。

留学先の米国でもジャーナル・クラブの内容は似たようなもので、違うのは英語で紹介しなければならないことだけでした。この時、英語論文に慣れるには、「一にも二にも多読！」とのアドバイスを受け、たくさんの論文を読み漁り、斜め読みの技(?)を体得しました。

残念ながら、その特技も、昨今、加齢と共に消滅の危機です。待ってくれ-----っ!

\*\*\*\*\*

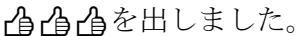
兵庫医大の、今の免疫学講座に赴任しても同じ仕組みのジャーナル・クラブが続きました。  
臨床講座の大学院生も英語論文を紹介しました。

独立してからも、何の躊躇もなく  
英語論文紹介のジャーナル・クラブを開催しました。

しかし、臨床講座の医師が大学院の門を叩いた時のことです。

その学生さんの希望は  
「学位をとったら研究者にはならず臨床医に戻りたい」でした。

これを聞いて、ジャーナル・クラブで英語論文を読む意味に疑いをもち始めました。  
当時でもパソコンを使えば自動翻訳ができるのに。  
そもそも、ジャーナル・クラブの目的は、英語論文の翻訳ではなく、  
論文の内容を理解することなのに。

ということで、彼女には、  
選んだ英語論文の自動翻訳を紹介してもらうことに、を出しました。

人類はドラえものの道具「翻訳こんにやく」を手に入れました。  
英語論文の言語の壁が消滅したのです。イノベーション万歳！

\*\*\*\*\*

とはいえ、日本語は、英語と違い、論理の内容を表現するのに不向きな言語です。

例えば、日本語には複数形や定冠詞が無い、  
主語を明記しない、言い回しがまどろっこしい、とかです。

英語の方が、サイエンスの内容を的確に、正確に記述できます。  
加えて、研究成果は、今のところ、英語論文で公刊するのが王道です。

ということで、研究者を目指す皆さん！  
英語論文を読んで、英語で論文を書く準備運動をして下さい。

老婆のつぶやきでした。

